



羅針盤

人生長生きして、 誰が喜んでいるのか

小出純子

全老健 常務理事

表題の言葉は、2008年6月の梅雨空のもと、日比谷公園大音楽堂で「介護職員の生活を守る緊急全国集会～いまこそ、私たちの声を国会に、そして官庁に!!～」をスローガンに行われた決起集会での、当時の全国老人保健施設連盟河崎茂委員長の発言である。

私は、当時研修医の期間を終え、まだまだ医師としてはかけ出しの頃に参加させていただいた。そのときは将来老健施設に関わる医師として勤務することは全く想像していなかった。しかし、この言葉を聞いたときは大変胸を打たれ、老健施設の管理医師として勤務する現在でも、常に心に留めている言葉である。

「人生長生きしても、そこに喜びや希望がなくてはならない。高齢者ご自身はもちろん、ご家族、そして老健施設を支えるスタッフ全員が希望をもって喜べる人生でなくてはならない」というのが私のこの言葉の解釈である。

この決起集会においては、さまざまな先生方のご尽力があり、その後、介護職員処遇改善交付金が交付されることとなった。

それから17年たった現在、我々を取り巻く環境はどのように変化したのだろうか。賃金構造基本統計調査による介護職員賃金の推移は、全産業平均と比較しても8.3万円の差があることが明らかになっている。2025年5月に全老健の東憲太郎会長を中心に「介護現場で働く人々と家族の暮らしを守る集会 私たちを見捨てないでください～介護現場で働くあらゆる職員にも十分な賃上げを!!～」が行われた。

会長のさまざまなご尽力の結果、骨太の方針に「物価高騰などを踏まえた対応に相当する増加分を加算する」と明記された。いま、まさに17年前の処遇改善交付金が決定されたときと同じ状況なのではないか。国民が住み慣れた地域で希望をもって生きるために重要な

は、安定した医療介護を提供すること以外にないだろう。

そのなかで、老健施設として、地域を支えるためにはどのような役割を担っているのだろうか。「2040年に向けたサービス提供体制等のあり方」検討会（以下、あり方検討会）や地域医療構想で議論されている。

あり方検討会では、人口減少スピードの地域差が顕著となるなか、サービス需要の変化に応じたサービスモデルの構築や支援体制、また地域包括ケアと医療介護連携、認知症ケアなどを検討事項として議論している。

老健施設は地域包括ケアシステムの中心を担える施設であると考え。

地域包括ケアシステムとは、住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、医療介護、予防、住まい、生活支援が包括的に確保される体制が構築されることであり、まさに老健施設の役割そのものではないだろうか。

老健施設は在宅支援のための施設であり、リハビリを提供し、機能維持、回復の役割を担う施設であることと定義されている。具体的には入所サービス、ショートステイ、通所リハビリ、訪問リハビリなどがそれにあたる。管理医師が地域のかかりつけ医と連携しながら、療養、リハビリ、薬剤などの情報を共有し、リハビリ、一定の医療、認知症ケア、また看取りやターミナルケアにも対応する。また退所後も、通所リハビリや訪問リハビリ、ショートステイなどを活用し、高齢者が元気に、また希望をもちながら住み慣れた地域で生活を営むことができる。各地域に設置され、さまざまな専門職が配置されている老健施設こそが地域を支え、高齢者の人生の最高の伴走者になり得るのではないか。まだまだ老健施設の役割は非常に大きい。

「希望や喜びをもった人生を」。微力ながら、そのお手伝いに尽力したいと思う。